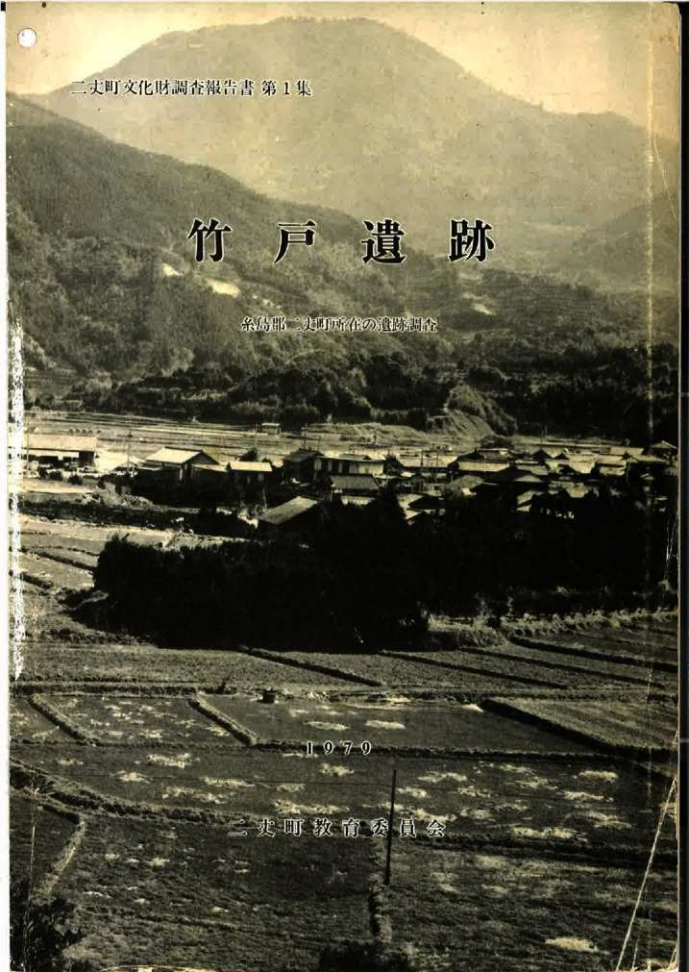


A black and white photograph of a village in a valley. In the background, there are large, forested mountains. The middle ground shows a cluster of traditional Japanese houses with tiled roofs. The foreground consists of a large, flat, open area, possibly a field or a dry riverbed, with some low-lying vegetation and a few small structures. The overall scene is peaceful and rural.

二丈町文化財調査報告書 第1集

竹戸遺跡

糸島郡二丈町所在の遺跡調査

1979

二丈町教育委員会

序

此の報告書は、糸島郡農協の晩かん類低温貯蔵庫の建設予定地が、同郡二丈町竹戸遺跡にかかっているので、県文化課に連絡の上、上記建設予定地の範囲内で、昭和53年11月27日から54年1月13日の間、発掘調査を実施した調査報告書であります。本来歴史上、当地は大宰府から宅岐、対馬を経て大陸に至る交通の要衝であり、同地方には、駅家があったとの記録がありますが、該地の水田の表土を削ぎとると、整然とした柱の跡、溝跡、土器類などを発掘、駅家と推定される建物跡が現われました。沢村仁九州工大教授によれば、「駅家跡なら重大発見」といっておられ、今後の律令時代の、此種の研究資料に利用出来れば幸と思います。尚機会があれば隣接地の調査も実施したいと思います。

一方、発掘調査、報告書の作成を担当された県文化課の方々の長期に亘る努力に深くお礼申し上げます。

昭和54年 3月31日

二丈町教育委員会

教育長 渡 辺 敏 伸

例 言

1. 本書は、糸島郡農業協同組合による冷凍倉庫建設に伴い、昭和53年11月27日から昭和54年1月13日の間に実施した竹戸遺跡の発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は、二丈町教育委員会が事業主体となり、福岡県教育委員会の指導のもとに実施した。
3. 実測図作成にあたっては、福岡県教育庁文化課、宮小路昌宏、川述昭人、木下修、佐々木隆彦があたり、編集は佐々木が担当した。
4. なお、当報告書は道路公社、苅原土木両敷地内の発掘地点と同一の遺跡のため、内容が若干重複する箇所がある。

目 次

I は じ め に	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 遺 跡 の 概 要	3
1. 調査の概要	3
2. 遺 構	3
3. 遺 物	11
IV お わ り に	12

I はじめに

糸島郡二丈町大字吉井字竹戸に糸島郡農業協同組合による冷凍倉庫の建設が計画され、事前に農業協同組合、二丈町教育委員会と福岡県教育委員会の間で協議がなされ、遺跡の確認調査を実施する事になり、同敷地に隣接する箇所でも道路建設に伴い発掘調査を実施していた県文化課職員栗原和彦・馬田弘稔に確認調査をお願いした。

その結果、敷地内にはかなりの密度で柱穴群が検出され、数棟の掘立柱建物の存在が確認されたため、二丈町教育委員会が総額200万の国庫補助を受け、福岡県教育委員会の指導のもとに昭和53年11月27日から昭和54年1月13日まで発掘調査を実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者	二丈町教育委員会教育長	渡辺 敏伸
庶務担当	同 教育課長	西 辰夫
	同 社会教育主事	鬼島 利隆
調査員	福岡県教育庁管理部文化課	
	調査第1係長	宮小路賀宏
	同 主任技師	川遠 昭人
	同 技師	木下 修
	同 技師	佐々木隆彦（調査主任）

なお、調査の遂行にあたっては、日高正幸氏、糸島郡農業協同組合福吉支所長吉田北海氏並びに地元住民各位の御理解と御協力を得た。

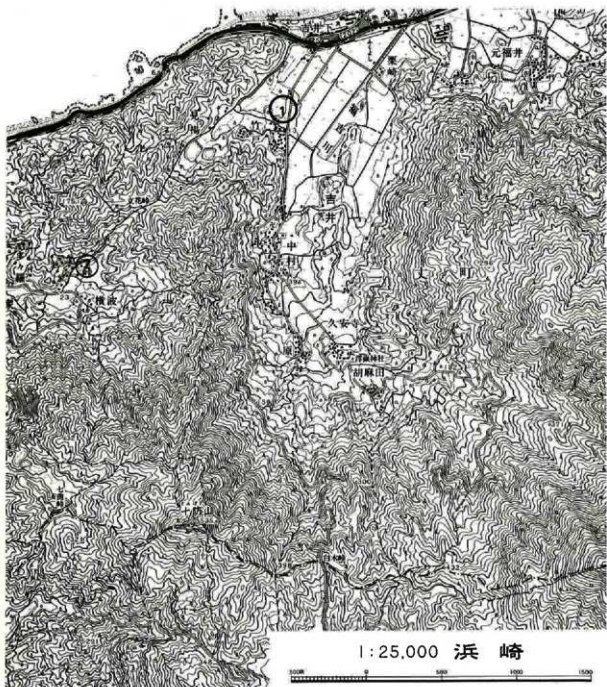
II 遺跡の位置と環境

竹戸遺跡は、福岡県糸島郡二丈町大字吉井字竹戸に所在する。

当地は、雷山山系から派生する山々が連なり、浮岳（905米）、十坊山（535米）の連山が海岸近くまで迫っており、狭い扇状地を形成している。扇状地の中央部には、福吉川が蛇行し唐津湾に流れ込む。福吉川の西側は、低い扇状台地を形成し、海岸近くまで舌状に延びている。その台地上に遺跡は存在する。

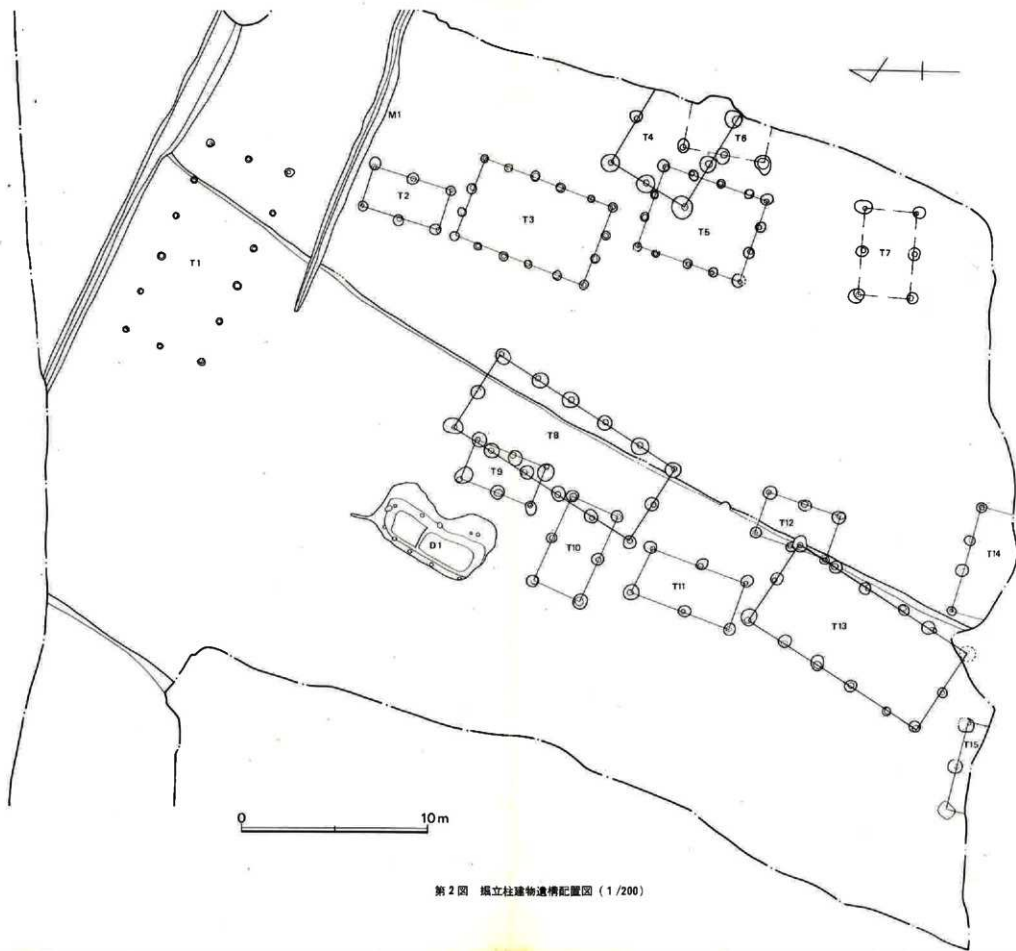
福吉川の東側山麓には、最近発掘調査が実施され多大の成果を得た縄文晩期の広田遺跡がある。また近くには奈良時代の竪穴住居跡も発掘されている。

さらに、深江から鹿家にかけては、筑前国駅家等の記載が文献に見受けられる。



第1図 遺跡周辺地形図

1. 竹戸遺跡 2. 佐野氏家比定地



第2図 掘立柱建物遺構配置図 (1/200)

III 遺 跡 の 概 要

1. 調査の概要

竹戸遺跡は、浮岳・十坊山の北側に広がる狭い扇状地内の低い舌状台地上に在る。調査地区は、冷凍倉庫敷地内の約2,000㎡を対象としたが、同時期に調査を実施していた隣接する前原土木・福岡県道路公社の道路建設内の発掘地点と同一の遺跡であるため、事業主体の相違から便宜的に竹戸Ⅰ（前原土木）、Ⅱ（道路公社）、Ⅲ（二丈町教育委員会）地点として調査を遂行した。

発掘調査は、確認調査の時点で機械力を投入して表土剥ぎを行っていたため、遺構検出の作業からとりかかった。調査がかなり進行していた竹戸Ⅰ・Ⅱ地点からは、数棟の掘立柱建物、溝状遺構、井戸跡の他、弥生時代中期前葉の円形住居跡2軒等が検出されており、Ⅲ地点も同様の遺構が想定された。

調査の結果、Ⅲ地点からは弥生時代中期初頭の袋状竪穴2基、同中期前葉の小児用竪棺墓2基、発掘区南西隅からは方形の竪穴住居跡1軒の他、弥生、古墳、平安、鎌倉期にかけての掘立柱建物15棟、東西に走る溝状遺構2条及び竪穴遺構1基を検出した。

発掘区は、西側方向に緩い斜面を呈しており、調査の結果、平安期頃に整地した事が判明した。遺構検出時には、弥生時代中期前葉頃の土器が散布しており、柱穴内にもかなりの同時期の土器が出土しているところから、弥生時代の住居跡が削平を受けたものと思われる。袋状竪穴も同様に床面を残存するのみである。

2. 遺 構

1. 掘立柱建物（第2図、図版1-1）

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地点で総数17棟を検出し、13棟を完掘した。地形は西側に傾斜し、削平を受けた柱穴もある。建物は少なくとも3期に区分できる。2・6・7・9・10・11・12・15号が最も古く、弥生時代か古墳時代の倉庫跡と思われる。次が4・8・13号で平安時代前期頃と思われ、1・3・5・14号が鎌倉期の建物である。

1号掘立柱建物（第3図、図版1-2）

溝1の北側に位置し、溝に平行する2間×5間の建物である。長方形プランからずれる柱穴が数個在る。主軸方位はN66°Wにとり、桁行間1,110cm、梁間間440cmを測る。柱跡の不明瞭な柱穴が在り、四隅の柱穴は他の柱穴よりも深い。

2号掘立柱建物（第3図、図版1-3）

3号に隣接した建物で1間×2間の建物である。主軸方位N16°Eにとり、桁行間430cm、梁間間250cmを測る。P4・5は柱跡を残さない。

3号掘立柱建物（第4図、図版2-1）

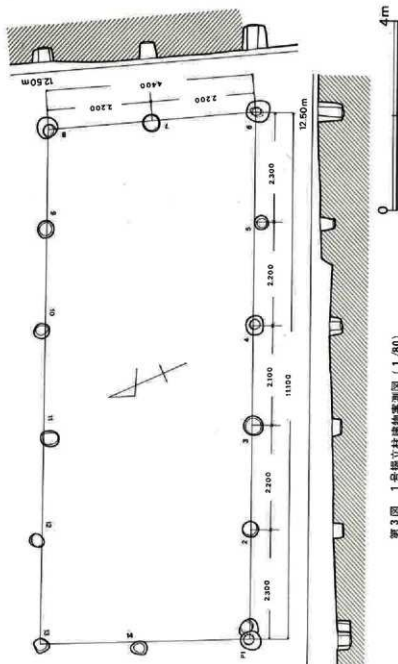
溝1の南に在り、溝に直行する3間×5間の建物である。主軸方位をN20°Eにとり、規模は、

桁行間730cm、梁間間430cmを測る。柱跡が不明瞭な柱穴がある。柱穴は削平を受け全体的に浅い。P10・11は、長方形プランからはずれている。

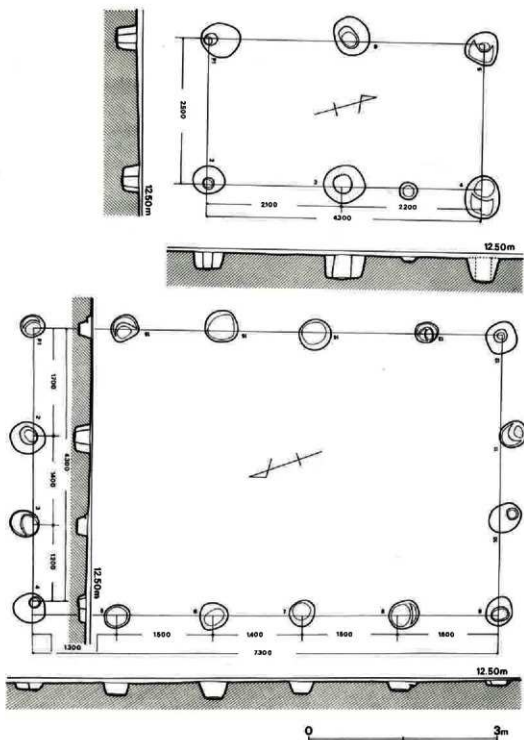
4号掘立柱建物
(第5図、図版2-2)

当遺跡の建物の中で最大の掘方を有す建物の1つである。東側半分は道路のため未掘である。6号建物を切っており、6号建物が1間×2間の建物と思われるので、他の1間×2間の建物よりも時期的に新しくなる。主軸方位はN60°Wにとり、8号・13号建物と直行する。桁行間は完備していないため不明であるが、P3・4・5間は各270

cmを測り、梁間間は460cmを測る。P1からP6まですべて柱跡を残す。P1・3は他の柱よりも深い。P2・4・5からは川原石を利用した根石を検出した。



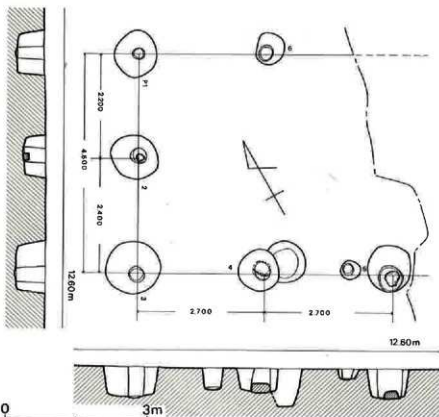
第3図 1号掘立柱建物実測図(1/80)



第4图 2号·3号孤立柱建物实测图(1/60)

5号掘立
柱建物（第
2図）

4号建物
と重複して
いるが、柱
穴の切り合
い関係はな
い。3号建
物とは平行
しており、
同時期のも
のと思われる。この建
物は、1度
の建て直し
を行っているが、図示
はしていな



第5図 4号掘立柱建物実測図（1/80）

い。3間×4間の建物で、主軸方位はN18°Eにとり、桁行間570cm、梁間間450cmを測る。柱穴全てが柱跡を残す。P4・5及びP11・12の桁行柱間は狭く、100・110cmを測る。

6号掘立柱建物（第2図）

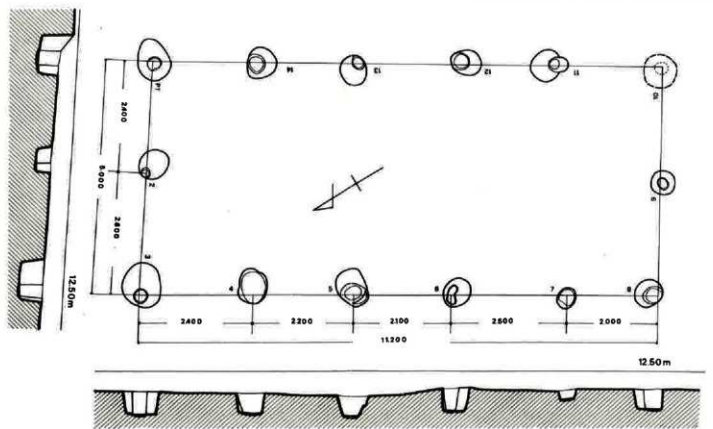
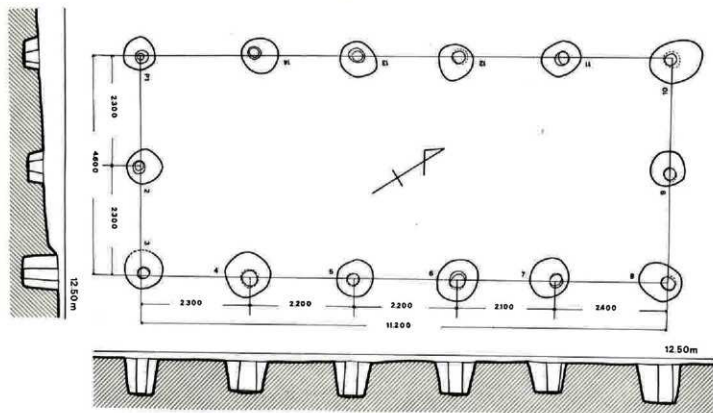
東側の道路のため、完掘していない。4号建物に切られている。半掘のため明らかでないが1間×2間の建物であろう。主軸方位はN10°Eにとり、桁行間は440cmを測るが、梁間間は不明である。

7号掘立柱建物（図版2-3）

発掘区の南東に位置する1間×2間の建物である。全体的に削平が著しく、掘方が削られ柱跡のみ残存する柱穴も見られる。規模は桁行間465cm、梁間間280cmを測る。主軸方位はN87°Eにとる。

8号掘立柱建物（第6図、図版2-4、3-4）

当遺跡で13号とともに最大の規模を有し、まとまった建物である。9号・10号建物と重複しているが、掘方の切り合いはない。他の箇所との切り合いから9号・10号よりも新しい。2間×5間の建物で、規模は、桁行間1,120cm、梁間間460cmを測る。主軸方位はN32°Eにとり、柱跡



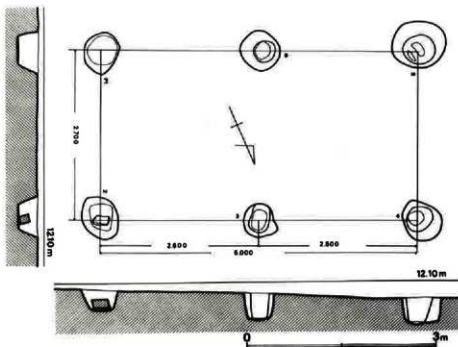
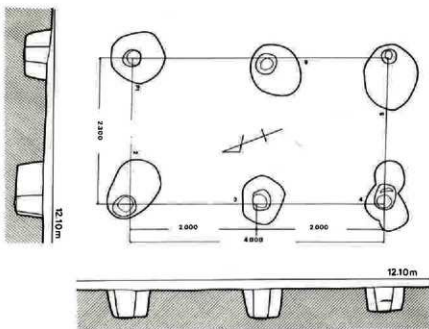
第6图 8号·13号榑立柱建筑物实测图 (1/80)

0 4m

の残りも大変良好である。柱跡は底部の方が大きく、若干内湾気味になる。柱穴は西側が耕作で削平を受けているが、全体的に深い。特に四隅の柱穴は深く（P1は削平されて浅い）、P3は76cm、P8は77cm、P10は68cmを測る。

9号掘立柱建物（第7図 図版3-1）

8号と重複した建物で8号と同規



第7図 9号・10号掘立柱建物実測図（1/60）

模の掘方を有す。1間×2間の建物である。規模は、桁行間400cm、梁間間230cmを測る。主軸方位はN21°Eにとる。柱穴は削平を受けているわりには深い。

10号掘立柱建物（第7図、図版3-1）

8号と重複しているが掘方の切り合いはない。1間×2間の建物では最大規模の部類に入る。規模は、桁行間500cm、梁間間270cmを測る。主軸方位はN66°Wにとる。P2は、自然石を利用して根石としている。

11号掘立柱建物（第8図、図版3-2）

1間×2間の建物である。この種の建物では最大規模を有し、桁行間570cm、梁間間260cmを測る。P2は長方形プランから若干ずれる。柱跡はP4を除いてすべて遺存する。主軸方位はN20°Eを示す。

12号掘立柱建物（第8図、図版3-3）

最大規模の13号建物と重複しており、柱穴の切り合い関係の明らかな1間×2間の建物である。この切り合い関係から1間×2間の建物類が他の建物より先行することが判明した。規模は、桁行間405cm、梁間間240cmで、主軸方位はN19°Eを示す。

13号掘立柱建物（第6図、図版3-3・4）

4・8号建物群と同一の2間×5間の建物である。梁間柱のP10は削平されている。掘方は削平を受け4・8号よりも若干規模が小さい。主軸方位をN31°Eにとり、規模は、桁行間1,120cm、梁間間500cmを測る。

2. 竪穴遺構（D-1号）（第9図、図版4-1）

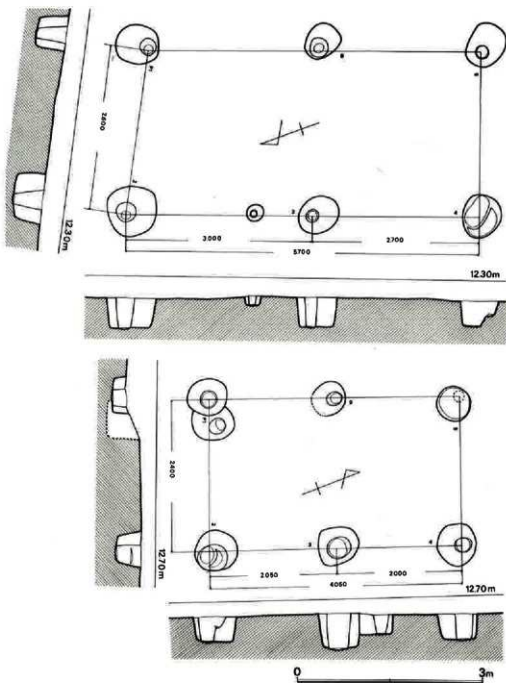
8号建物の西側に位置し、隅丸長方形の平面形態を有す。東側の掘込み面は浅く、二段掘りである。壁面は緩かな傾斜を呈する。北側壁隅には、幅10cm強の浅い溝が走るが途中で消滅する。床面は段を有し、南側が10cm程低くなる。壁面には11個の柱穴を検出したが、柱穴は浅い。西壁側の柱穴は一定の間隔に列んでいるが、東側壁の柱穴は間隔が一定しない。

規模は、長軸620cm、短軸は広い所で370cm、狭い所で270cm、深さは浅い箇所で49cm、深い所で61cmを測る。主軸方位はN29°Eを示す。

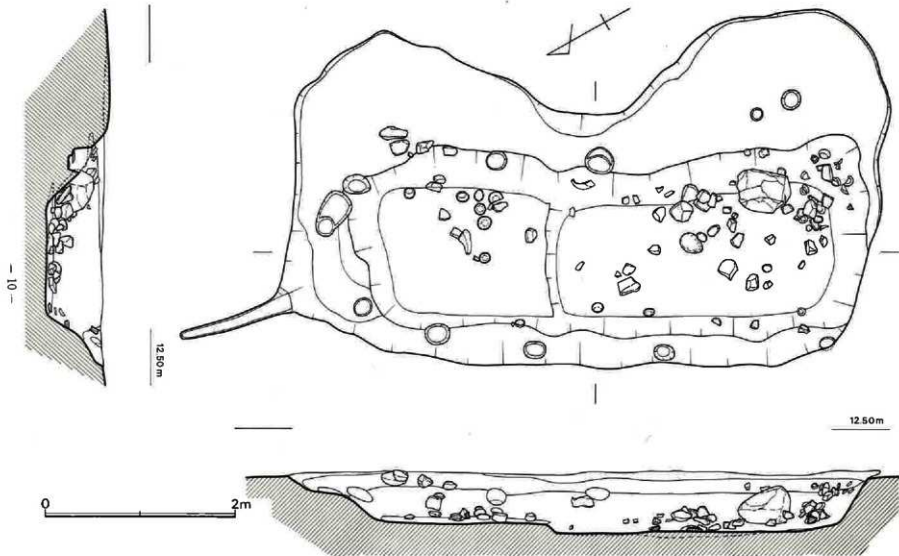
遺物出土状態は、床面に密着した遺物と浮いた遺物とがある。種類は、高台付碗・杯・黒色土器・瓶の把手・滑石製鏃・籬の羽片・砥石・花崗岩塊の他、鉄滓がかなり出土している。出土の土器から遺構の時期は、9世紀末～10世紀初頭頃と思われる。

3. 溝状遺構1（第2図）

1・2号建物の間を東西に延びる断面U字形の溝で、巾約80cm、深さ30cm前後を測る。溝は西側段落ちで削平され消滅する。出土遺物は、青磁片の他、川原石、鉄滓が出土しており、建物の遺構配置から考慮すれば、1・3・5・14号建物と同時期と思われる。



第8图 11号·12号掘立柱建物実測図 (1/60)



第9図 豎穴遺構実測図(1/40)

4. 住居跡 (図版4-2)

発掘区北西隅の道路公社敷地内から弥生時代中期前葉の円形住居跡2軒を検出した。2軒は重複しており、1号住居跡が新しい。2号は、2乃至3度の拡張をしている。いずれも6本柱と思われ、中央ピットを有する。1号には間仕切りと思われるV字形の細い溝が中央ピット方向に走る。遺物は砥石・土器片が出土している。

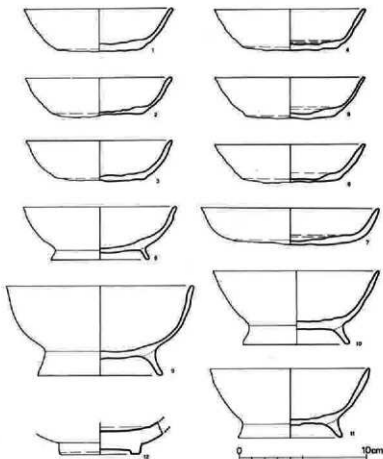
さらに、発掘区南西隅からは方形の住居跡を検出した。完掘に至っていないため、規模、柱穴数、時期等は不明。

3. 遺物

竪穴遺構、溝1の出土土器 (第10図、図版4-3)

杯形土器 (1-7)

1～6は法量がある程度一定しており、規格性が認められる。口径11.5cm～11.9cm、底径6.5cm～7.7cm、器高3.0cm～3.3cmを測る。底部には全てへら切り痕を残す。体部及び底部の区別が明瞭でなく、底部が若干丸味を持つ。体部内外面とも撫で仕上げで、淡赤褐色、淡黄褐色を呈す。7は杯の中では法量が大きく、口径14cm、底径10cm、器高2.9cmを測る。底部にはへら切り痕を若干残す。



第10図 竪穴遺構、溝1出土土器実測図

椀形土器 (8-11)

8は半分欠損している。口径12cm、高台径7.6cm、器高4.1cmを測る。体部は若干丸味を持つが、口縁部と体部との区別は明瞭でない。器面は撫で仕上げである。高台は低い。9は内黒の椀で、出土した椀形土器の中では最大の法量を有し、口径14.7cm、高台径9.7cm、器高7.0cmを

測る。体部は若干丸味を有し、高い高台を貼り付けている。10・11は21号同型で、口径13.1cm、12.6cm、高台径8.3cm、8.1cm、器高5.7cm、5.4cmを測る。体部下位で若干屈曲し、口縁部に続く。体部と口縁の区別は不明瞭。器面は撫で仕上げで、底部に若干のへう切り痕を残す。いづれも高い高台を貼り付けている。9～11は体部に古い形態を残すが、高台には若干新しい要素が見られる。12は溝1の最下層から出土した青磁碗の底部で高台径6.3cmを測る。胎土は灰色を呈し、灰味緑色の釉がかけられている。龍泉窯系のものである。

IV おわりに

I・II・III地点で総数17棟の掘立柱建物を検出し、III地点が建物群の西端であることが判明した。個々の建物の時期は明らかでないが、建物、溝の配置及び若干の切り合い関係から一定程度の予測は可能である。当遺跡の建物群はIII期に区分できる。ここでは便宜的にA・B・C期とする。

A期・柱穴の切り合い関係から観察すると、4号建物が6号建物を切っており、13号建物が12号建物を切っている。この6号及び12号建物は、他の1間×2間の建物と同一時期と思われる。建物の配置からも、主軸方位が平行乃至直行していることから窺える。この種の建物が当遺跡の掘立柱建物の中で最も古い時期の建物で、弥生時代か古墳時代の倉庫跡と思われる。

B期・建物の配置から4号建物と8号・13号建物の主軸が直行しており、掘方の規模も同等であり、同時期の建物と考えられる。建物の時期は明確でないが、西側の竪穴遺構と主軸を同じくし、竪穴遺構の出土遺物が9世紀末から10世紀初頭頃であることから、平安時代前期頃の建物であることに火過なからう。

C期・1号・3号・5号・14号が該当する建物で、主軸が平行乃至直行することから同時期と思われる。さらに1号・3号建物は、溝1と平行乃至直行関係にあり、溝1最下層から出土した青磁片から、C期の建物は鎌倉期に比定できる。この時期になると掘方の規模が非常に小さくなる。

竪穴遺構に関しては、竪穴の羽口、鉄滓出土量から小鍛冶遺構と判断した。壁の斜面には柱穴が巡り、上部構造を有したものである。遺構の時期は、出土した土師器類が太宰府政庁跡（SK678）から出土した土師器類と同時期か若干新しい形態を有し、9世紀末から10世紀初頭頃に比定でき、B期の建物群に伴う遺構である。

遺跡の性格について

建物群の性格であるが、4号・8号・13号建物は、かなりの規模の掘方を有し、注目される。このことは、9世紀末から10世紀初頭頃に何らかの公的機能を有した建物群であることが考えられる。地形的には当該地周辺は、深江を除き海岸線近くまで山々が迫り、その中で吉井地区が最も広く、唯一生産的な場所である。

当地周辺を文献で観ると、「延喜式」(巻二十八)兵部省・西海道に次の様に記されている。一筑前国駅馬「独見。夜久各十五疋。嶋門廿三疋。津日廿二疋。席打。夷守。美野各十五疋。久留十疋。佐尉。深江。比替。額由。石瀬。長丘。把伎。廣瀬。隈埒。伏見。綱別各五疋。」

竹戸遺跡の近くには、オノ原の小字名が認められ、オーサイ＝佐尉と云うことから、オノ原を佐尉駅家に比定されている。佐尉駅家は筑前国の国境にあり、これに対するのが肥前国大村駅家であり、佐賀県東松浦郡浜崎玉島町に比定されている。東には深江駅家が認められ、大宰府へ通じる官道として機能していた。

「佐尉駅家」の名は、延喜式に最初に現われ、延喜式が編纂された927年(延長5年)とB期の建物の時期とが符合する。しかし、この事が短絡的に佐尉駅家に関連するとは云えない。ここでは可能性の問題に留めることにする。さらには、オノ原の調査の機会を期待したい。

註1 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」—九州歴史資料館研究論集—1976

註2 森岡謙二郎「古代日本の交通路Ⅳ」—大明堂—1978

竹戸遺跡掘立柱建物計測表

建物番号	柱間	梁間柱間(平均) cm	梁間cm	桁行柱間(平均) cm	桁行cm	期別	備考
1号	2間×5間	220	440	220	1,110	C	
2	1間×2間	250		215	430	A	
3	3間×5間	143	430	146	730	C	
4	2間×5間?	230	460	270	?	B	半掘、6号を切っている
5	3間×4間	150	450	143	570	C	建て直し
6	1間(?)×2間	?	?	225	450	A	半掘、4号に切られている
7	1間×2間	280		233	465	A	崩壊著しい
8	2間×5間	230	460	224	1,120	B	
9	1間×2間	230		200	400	A	
10	1間×2間	270		250	500	A	
11	1間×2間	260		285	570	A	
12	1間×2間	240		203	405	A	13号に切られている
13	2間×5間	250	500	224	1,120	B	12号を切っている
14	3間×5間?	133	400	?	?	C	2/3未掘
15	1間(?)×2間	?	?	250	500	A	半掘
16	2間×2間	260	520	270	540	C(?)	I 地点
17	1間×2間	240		240	480	A	

(凡例) A 弥生・古墳時代
B 平安期
C 鎌倉期



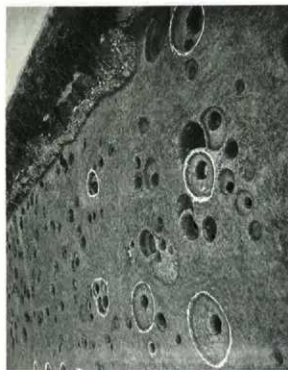
(1) 遺跡全景



(2) 1号掘立柱建物



(3) 2号掘立柱建物



(2) 2号直立柱残部



(4) 6号直立柱残部



(1) 3号直立柱残部



(3) 7号直立柱残部



(2) 11号独立柱建物



(4) 8・13号独立柱建物



(1) 9・10号独立柱建物



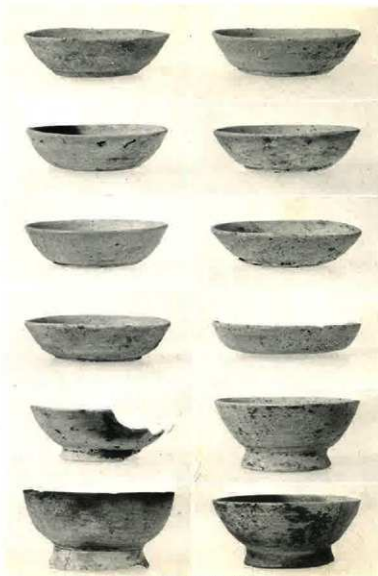
(3) 12・13号独立建物



(1) 3号竪穴遺構



(2) 1・2号住居跡



(3) 竪穴遺構の出土土器

二丈町文化財調査報告書

第 1 集

昭和 54 年 3 月 31 日

発 行 二 丈 町 教 育 委 員 会
二 丈 町 大 字 深 江 1 0 7 1

印 刷 青 柳 工 業 株 式 会 社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の 31

